

第8回日本精神・心理理学療法研究会

運動機能科学領域 一ノ瀬 航

2023年3月12日、第8回日本精神・心理理学療法研究会がリモートで開催されました。日本精神・心理理学療法研究会は、設立11年目になります。創立の趣旨の中には、『日本では近年「精神疾患」が5大疾病に加えられ、認知症疾患医療センターの設立や地域包括ケアシステムの構築が進められる中で、認知症を含む精神疾患への理学療法士の対応は重要性を増している。また、理学療法の実践においても、身体障害に加え、気分障害や不安障害、認知症、統合失調症などの精神障害を合併する対象者は少なくない。当部門は、対象者の精神・心理床上を正しく理解し、適切な対応ができるよう、分科学会や他専門部門と連携し、補完するかたちで、精神・心理領域の知識や理学療法治療技術に関する普及と啓発に努める。』があります。私は、この学会で「地域在住高齢者における身体的フレイルとうつ傾向との関連について」という演題名で発表をしました。本発表は本学が貝塚市と共催している「つげさんヘルスチェック」事業での調査データの内容で行いました。

身体的フレイルは将来の死亡リスクや要介護発生リスクが上昇することが知られています。一方で可逆性があるため身体的フレイルを早期に発見して改善することは非常に重要な視点となります。近年、この身体的フレイルに陥る精神心理的要因として、抑うつが存在が指摘されています。そこで、地域在住高齢者における身体的フレイルと抑うつの関連について調査しました。65歳以上の地域在住高齢者199名を対象にフレイル評価・GDS-15・MMSEを実施しました。結果、身体的フレイルの該当率は、身体的フレイル群は7名（3.5%）、身体的プレフレイル群は

104名（52.3%）、健常群88名（44.2%）となりました。また、身体的フレイル分類別のうつ傾向該当率は身体的フレイル群5名（71.4%）、身体的プレフレイル群41名（36.5%）、健常群26名（23.9%）と有意差が確認されました。また、認知機能は3群間に有意差が認められませんでした。以上から、ヘルスチェックに参加した地域在住高齢者の身体的フレイルとうつ傾向の関連が示唆されました。

